

パンフレットで見る「流水ノロッコ号」27年間の歴史の変遷

宮内 盛一

090-0801 北海道北見市春光町6-4-51, 北見市立小泉小学校

The 27 Years History of “Ryuhyo Norokko Train” Revealed by Flyers

MIYAUCHI Seiichi

Koizumi Elementary School, 6-4-51 Shunkō-chō, Kitami, Hokkaido 090-0801, Japan. ✉ktm-koizumi-s1@hokkaido.school.ed.jp

はじめに

かつてオホーツク海沿岸の稚内から斜里まで、ごく一部の区間を除いて鉄道路線が存在した。しかし、国鉄再建政策による特定地方交通線の切り捨てにより、1989年以降唯一残ったのが、釧網本線の網走－知床斜里間である。

その釧網本線を利用して、冬のオホーツク海沿岸地域の自然景観である流水を、トロッコ客車から眺めるスタイルの流水観光列車「流水ノロッコ号（オホーツク流水ノロッコ号）」(1990–2016)が、かつて存在した。

惜しまれつつも、2016年を最後に運転取りやめとなったが、流水ノロッコ号は、冬季間のいわばシーズンオフに流水観光列車という新しい鉄道観光分野を開拓し、それを確立した功績は大きい。本稿では、これまでに発行された公式パンフレットを読み解きながら、流水ノロッコ号の27年間の歴史の変遷と果たしてきた役割について明らかにしたい。

ノロッコ号の誕生

1987年に国鉄分割民営化によって発足した北海道旅客鉄道会社は、発足後すぐに、鉄道利用の促進のため、鉄道を利用した旅客の誘致や、関連施設への集客を積極的に図った。釧網本線の所属する釧路支社(当初は釧路支店)管内でも多数の例があり、民営化直後の3年間のおもな事例を以下に挙げる。1987年には原生花園駅の開業、ツーリングトレイン、

ステーション画廊の開設などがあった。1988年には武佐駅の開業、川湯駅の川湯温泉駅への改称、釧路湿原駅の開業などがあった。1989年にはくしろ湿原ノロッコ号運転開始、十勝大平原ノロッコ号の運転などがあった(北海道旅客鉄道株式会社釧路支社2001)。

とりわけ、釧路湿原内を走る唯一の公共交通機関である釧網本線は、1987年の北海道旅客鉄道発足と同年に釧路湿原が国立公園に指定され、湿原観光のアクセスとして期待された。翌年に臨時駅の釧路湿原駅が開業し、熱気球フライト体験の実施など、観光事業が開発された(笹田・岸2001)。その一環として運転されたのが、くしろ湿原ノロッコ号である。

運転初年のくしろ湿原ノロッコ号は、釧路－塘路間に、7月から8月にかけて1日2往復、9月の3日間は1往復運転され、「日本一おそ〜い列車で日本一ひろ〜い“くしろ湿原”に沈む日本一の夕日を見ませんか」のキャッチコピーと、「客車・幌馬車風の貨車・車掌車の3両編成」(北海道旅客鉄道発行のダイヤ(以下、ダイヤと略)1989年8月号)、「時速は約三十キロと、定期列車の約半分の速さ。三両編成で、客車に幌馬車風の貨車、車掌車を改造した観覧車を連結したユニークな列車です。なかでも貨車には窓ガラスがなく、湿原を渡る風に吹かれながら、のんびりと景色を眺めることができます。」(北海道旅客鉄道広報誌「The JR Hokkaido」1989年8月号)という鉄道列車に求められる快適な条件とは正反対の風変りな列車

は、ノロッコ号の名称とともに、北海道のトロッコ列車の代名詞となった(笹田・岸2001)。

国鉄・旅客鉄道会社のトロッコ列車の嚆矢は、国鉄時代の1984年に四国の予土線で運転された清流しまんと号である(笹田・岸2001)。沿線に四万十川という自然景観を持つ路線に、余剰となった無蓋貨車にテントを張っただけの展望車が、気動車に牽引されて時速約30kmでノロノロと走る列車は、貨車に人を乗せて走ることなども含めて話題となり、その後の貨車改造トロッコ列車ブームの先駆けとなった。

くしろ湿原ノロッコ号に用いられた車両の前身は、国鉄最終年度の1986年から1988年の3年間、夏休み期間に函館-森間で運転された、くるくる駒ヶ岳「遊・遊トレイン」である(ダイヤ1988年9月号; 函館-渡島大野間鉄道開通100周年記念誌編集委員会2003)。それは清流しまんと号と同じく、国鉄経営合理化による客車列車・貨物列車の廃止によって余剰となった客車と貨車を用いて改造されたイベント列車であった。くしろ湿原ノロッコ号には、客車4両のうち1両と、無蓋貨車と車掌車を改造した展望貨車の3両編成が転用された(笹田・岸2001)。

貴重な自然景観を持つ釧網本線でのくしろ湿原ノロッコ号の運転は好評を博した(1990年1月11日、北海道新聞夕刊全道社会面)。そこで、湿原観光がシーズンオフになる翌年の1990年冬季には、釧網本線の斜里-網走間に、流水観光列車オホーツク流水ノロッコ号として運転されることとなったのである。

なお、車両の編成については後述するが、当初のくしろ湿原および流水ノロッコ号編成は、後に新たな編成に交代した。本稿では当初の編成を初代編成、後の編成を2代目編成と呼ぶことにする。

なお、ノロッコ号編成は、1999年にさらに1編成増備され、旭川-富良野間に富良野・美瑛ノロッコ号として運転されている(笹田・岸2001)。

研究方法

運転開始の1990年から最終年の2016年までに、沿線の主要駅で配布された北海道旅客鉄道釧路支社発行のパンフレットを利用し、そこから読み取れる事象を表にまとめた。まとめた項目は、形式、表紙と裏面、運転、編成、運賃と料金、接続、キャッチコ

ピー、車窓の観光拠点と景観、車両の観光的設備、沿線の観光拠点・景観・自然現象、沿線に生息する生物である。なお、パンフレットの記載項目の分類については、平井(2010)を参考にした。

なお、1992、1994、1995、2006の各年のパンフレットは未収集のため、内容については確認できないが、時刻表、北海道旅客鉄道広報誌「The JR Hokkaido」等より収集した情報を活用し、わかる範囲で記載した。2014年については、表紙データのみ北海道旅客鉄道釧路支社広報課より提供を受けた。

パンフレットの発行年によっては、SL冬の湿原号、マウントレイク摩周号、お座敷摩周号と関連して、釧網本線全体として取り扱っているものもあるが、流水ノロッコ号の運転区間外の記載は、本稿では対象外とする。加えて、ガイドマップに記載されているイラストについても本稿では対象外とする。

結果と考察

1. パンフレットの概観

1990年は記念すべき運転開始年で、2色刷りの印刷や、くしろ湿原ノロッコ号のイラストからの流用など、全体的に簡素である(図1)。

1991年は運転2年目である。前年の写真を使用しないのは予算の都合か、あるいは機関車と展望車の屋根が、赤色になったためか(図2)。

1993年はカラー印刷で、鱒浦トンネル網走方からの撮影である(図3)。

1996年は流水原に沿って走る初代編成が美しい。車内は相当寒そうで、2軸貨車のすさまじい乗り心地が伝わってきそうである(図4)。

1997年の走行写真は前年と同じものと類推する。流水の空撮写真が目を引く(図5)。

1998年は列車よりもオジロワシの方が大きい。リゾートあばしり号の写真も掲載されている(図6)。

1999年は2代目編成デビューの年、くしろ湿原ノロッコ号の合成写真である(図7)。右上の流水の写真は、観光客らしい複数人が流水に上がっている様子をシールで隠している。中央下部の路線図には、前年に知床斜里駅に改称されたはずが斜里駅のままである。さらに、指定席が連結されたのに、「座席は指定されていません」の表記など、誤植が多い年

である。

2000年は2代目ノロッコ号のヘッドマークのキャラクターであるオジロワシとペンギンが大きく掲載されている(図8)。裏面はSL冬の湿原号、釧網本線の冬の観光列車が賑わい始めた年である。

2001年からイラストによる編成表が掲載された(図9)。トマムサホロエクスプレスを利用したマウントレイク摩周号2年目の運転である。

2002年はノロッコ号、SL、マウントレイク摩周号を利用した、冬の釧網本線の旅を前面に押し出している(図10)。中国語繁体字訳が追加され、台湾や香港からの旅行者の増加を物語っている。

2003年のみ判型が異なる(図11)。お座敷摩周号の運転が開始される。販売コーナーのオリジナルグッズを初めて紹介している。

2004年は、前年のみ連結されたパーベキューカーを1両含む編成写真が中面に掲載されている(図12)。北浜駅の展望台が完成した。

2005年からお座敷摩周号運転が終了し、ツインクルバスに移行した。裏面には、道東へのアクセスとして、網走口にはオホーツク・流氷特急オホーツクの風、釧路口にはスーパーおおぞら・まりもが掲載されている(図13)。

2007年は流氷ノロッコ号利用20万人達成予想サイズが掲載されている(図14)。モデルの子どもを使って、車販カウンターやダルマストーブなどの車内設備を紹介している。

2008年の表紙写真は前年以前と思われ、ヘッドマークの部分が修正されているように見える(図15)。モデルの子どもを使って、顔ハメ看板の登場をアピールしている。

2009年は冬の道東スタンプラリー開催。SLとコラボレーションしたパンフレットが定着した様子である(図16)。

2010年は運行20周年の年である(図17)。SL、ノロッコ沿線探索ラリーが開催された。

2011年からモデルが変更される(図18)。

2012年から止別駅に全列車停車するようになった。モデルの写真は昨年度と同じようだが、新カットの掲載がある(図19)。

2013年からモデルが変更となる。車内限定グッズ

販売も掲載されている(図20)。

2014年は表紙データのみ(図21: JR釧路支社提供による)。中身は未見である。

2015年は運行開始25周年である。記念ヘッドマークは合成で、モデルが変更となる(図22)。SL冬の湿原号とコラボレーションしている。

2016年は最終年となる。表紙にキャッチコピーが全く見られない(図23)。モデルが変更されている。

2017年は流氷物語号の運転開始年である。表紙は止別の丘であるが、列車は映っていない(図24)。モデルは、前年と同じ人物である。裏面は英語、ハングル、繁体字による説明文である。

2. 印刷形式

表1に示したように、B5判である1998年(図6)をのぞいて、すべて仕上がりはA4判であった。年によっては2つ折り、3つ折りがあるが、2003年(図11)のみ2分の1観音折となっていた。1998年は例外で、くしろ湿原ノロッコ号と一緒に、両ノロッコ号の紹介的な内容であり、これとは別にパンフレットが存在する可能性がある。

運転初年である1990年(図1)は2色、1991年(図2)は3色刷りで、両年とも片面印刷であった。1993年(図3)から表面はカラーとなるが、両面ともカラーとなる2002年(図10)まで、年によって色数が異なった。

3. 構成

表紙と裏面の構成する要素を表1に示した。1990年(図1)、1991年(図2)は写真を使わず、初代ノロッコ号車両と流氷をイメージした線画による構成であった。これは、1989年発行のくしろ湿原ノロッコ号パンフレットのイラストを流用し、ヘッドマークのみ変更したと類推できる(ダイヤ1989年8月号)。運転区間である斜里と網走の間に記されたキャッチコピーは「シバレ体験」で、周囲がギザギザの囲み中に震えた文字を配置し、ところどころにひび割れを描き、「シバレた=凍った」様子を表現している。「オホーツク流氷」の文字も一文字ずつ氷をイメージしたギザギザの枠に囲まれている。ノロッコ号の表記は、丸みを帯びた文字の下半分に三層の横縞模様が入って

表1. 1990-2016年のノロッコ号パンフレットの印刷形式および構成.

西暦	平成	パンフレット 番号	形式		構成		備考	図番号
			仕上がり判型	色数	表紙と写真撮影地	裏面/見開き面		
1990	2	なし	A4判	2/0	ノロッコ号編成イラスト			1
1991	3	なし	A4判	3/0	ノロッコ号編成イラスト			2
1992	4		未見		未見		未見	
1993	5	EK410-16	A4判	4/0	鱒浦トンネル網走方			3
1994	6		未見		未見		未見/客車1両増	
1995	7		未見		未見		未見	
1996	8	なし	A4判	4/0	北浜駅付近			4
1997	9	EK901-19	A4判	4/1	北浜駅付近	くしろ湿原ノロッコ号		5
1998	10	なし	B5判2つ折り	4/4	北浜駅付近	くしろ湿原ノロッコ号	知床斜里駅と改称, 客車1両は新型に改 造のため減	6
1999	11	EK1012-19	A4判	4/0	北浜駅付近(くしろ湿 原ノロッコ号の合成)		新型車両3両編成	7
2000	12	EK1112-21	A4判2つ折り	4/4	止別川橋梁	SL冬の湿原号/釧網本線沿線 案内		8
2001	13	EK1212-16	A4判2つ折り	4/2	止別川河口付近	SL冬の湿原号/道東ガイドマッ プ		9
2002	14	EK1312-13	A4判2つ折り	4/4	止別川河口付近	冬の釧網本線の旅として3列車 をまとめて紹介	中国語(繁体字)併記	10
2003	15	EK1412-35	A4判1/2観 音折り	4/4	止別川橋梁	冬の釧網本線の旅として3列車 をまとめて紹介/道東ガイドマッ プ	インターネットサイトア ドレス掲載/客車1両 はパーベキュー車	11
2004	16	EK1512-39	A4判3つ折り	4/4	止別川橋梁	冬の釧網本線の旅として3列車 をまとめて紹介/釧網本線沿線 ガイドマップ		12
2005	17	EK1612-074	A4判3つ折り	4/4	止別川橋梁	SL冬の湿原号と流氷観光	英語表記/展望客車 1両増, 指定席1両増	13
2006	18		未見		未見		未見	
2007	19	EK1811-76	A4判3つ折り	4/4	止別川河口付近	SL冬の湿原号と流氷観光	もうすぐ20万人	14
2008	20	EK1901-70	A4判3つ折り	4/4	北浜駅付近	SL冬の湿原号と流氷観光		15
2009	21	EK2011-081	A4判3つ折り	4/4	ウエンバツ川河口付近	SL冬の湿原号と流氷ノロッコ号 観光ガイド	冬の道東スタンプラ リー開催	16
2010	22	EK2112-075	A4判	4/4	北浜駅付近	流氷ノロッコ号をもっと楽しむ!		17
2011	23	EK2212-077	A4判	4/4	止別川河口付近	流氷ノロッコ号をもっと楽しむ!		18
2012	24	EK2311-080	A4判	4/4	北浜駅付近	流氷ノロッコ号をもっと楽しむ!	止別駅に全列車停車	19
2013	25	EK2411-066	A4判	4/4	止別川河口付近	流氷ノロッコ号をもっと楽しむ!		20
2014	26	EK2511-054	A4判	4/不明	止別川河口付近	未見	表紙のみ閲覧	21
2015	27	EK2610-048	A4判3つ折り	4/4	止別川河口付近	SL・DL冬の湿原号/3つの国立 公園を走り抜ける2つの列車を 楽しもう!	指定席1両増	22
2016	28	EK2711-026	A4判2つ折り	4/4	止別川河口付近	SL冬の湿原号/釧網本線沿線 ガイドマップ	展望客車はすべて指 定席	23

おり、初代ノロッコ号車両のサイドラインと色を合わせているのが特徴である。これはホワイトを主体としたボディにグリーンとブルーのラインで湿原と川をイメージしたくしろ湿原ノロッコ号と同様のデザインである(ダイヤ1989年8月号)。「ッ」の次に目玉のような曲線が入り、「号」の文字の右下には揺れを表現

する三本の曲線がアクセントとして入る。このノロッコ号の文字デザインは、2代目編成にも受け継がれた。

表紙写真の撮影場所は、止別川河口付近(通称止別の丘)の俯瞰が最も多く、8回であった。同じ場所にある、止別川橋梁の写真を含めると12回になり、半数以上がほぼ同じ場所で撮影されていた。

裏面は、くしろ湿原ノロッコ号が2回、2000年(図8)から運転されたSL冬の湿原号等、釧網本線としてトータルで沿線紹介をしているのが11回であった。釧網本線とした年は、仕上がりりが3つ折りまたは2つ折りとなり、情報量が多い。2010年(図17)から2013年(図18)は流水ノロッコ号単独仕様となった。

なお、旅客への周知のため、運転開始前に駅頭に並べられるというパンフレットの特性上、表紙の写真は以前のものが用いられるため、実際の編成(2003年:図11)、ヘッドマーク(2015年:図22)と異なる場合があった。

4. 運転

列車名、運転開始日および最終日、計画運転日数、運転本数を表2に示す。列車名は途中で変更されていた。1990年(図1)から2000年(図8)まで「オホーツク流水ノロッコ号」、2001年(図9)から、2016年(図23)まで「流水ノロッコ号」となっていた。列車名が変更になっても、2001年(図9)から2007年(図14)まで、ヘッドマークは従来の「オホーツク」が入ったものが使われていたようだ。なお、2010年(図17)は運転20周年、2012年(図19)は釧網本線開通80周年(パンフレットに記載なし)、2015年(図22)は運転25周年のそれぞれ記念ヘッドマークがつけられた。

運転開始日は1990年から1992年までは2月中旬、1993年から1999年までは2月上旬のいずれも土曜日または日曜日で、週末のみの運転であった。2代目編成となった1999年からは、シーズンの平日も運転された。2000年から2003年は、曜日に関わらず、2月1日と固定され、それ以降は2013、2014年を除いて、1月最終土曜日となっていた。

運転最終日は、1990年から2008年まではおおむね3月中旬から下旬であった。2005年から2008年の3年間は、2代目編成導入の1999年以降としては例外で、3月中旬の平日に運休する期間があった。2009年以降は、途中の運休期間はなくなり、3月上旬から中旬の少し早い時期に運転が終了している。これはダイヤ改正が行われるのが3月中旬に多く、その前に終了するためと思われる。最終年の2016年は2月末で終了した。

計画運転日数は1990年から1998年の初代編成の時代はおおむね10日前後、それ以降は、毎日運転するようになったことで2000年(図8)には最大で60日間になった。その後は徐々に減少し、2012年には51日間と、増加するが、最終年度には2代目編成では最小の30日間であった。

運転本数は、初代編成時代の1990年から1997年までは斜里駅発1日1往復、初代編成最終年の1998年は斜里駅発2本、網走駅発1本の1.5往復と変則的であった。これは、網走からのリゾートあばしり号に接続するためであった。

2代目編成となった1999年以降は知床斜里発の1日2往復であった。

運転時刻は、1日1往復時代、往路は午前中に斜里駅発網走駅着、復路は1990年と1991年以降では異なり、1990年は網走駅発14:18、斜里駅着15:41と夕方少し前の設定であるのに対して、1991年は網走駅発11:49、斜里駅着12:59と、お昼ごろの設定に変更され、翌年以降もほぼ踏襲された。1998年は斜里発13:47が追加された。1日2往復時代は、毎年ほぼ同じ時間帯で運転されていた。知床斜里発午前9時前後、折り返し網走発は10時過ぎで、この折り返しである1号は、網走-知床斜里間は定期列車を運休してその時間帯を使って走っていた。そのため、他の列車の途中停車駅は、浜小清水と北浜のみであるのに対して、原生花園を除くすべての駅に停車した。なお、2012年から、全列車が止別に停車している。

5. 編成

a) 初代編成

1990年から1993年までの運転当初は車掌車、無蓋車、客車の3両編成をディーゼル機関車が牽引した(表2)。全車自由席である。1994年から客車が1両増え、4両編成となった(北海道旅客鉄道株式会社釧路支社2001)が、この客車は2代目編成の種車となったため、1998年には減車され、以前の3両編成に戻った(表2)。

b) 2代目編成

2代目編成は1999年に展望客車2両と普通客車1両の3両編成で登場した(表2)。初代と同じく、いず

表2. 1990-2016年のノロッコ号パンフレットに記載された運転情報、編成、運賃と料金および主な接続列車とバス、運賃は斜里(知床斜里) - 網走間の片道運賃、

西暦	平成	運転				編成				運賃と料金(円)			主な接続列車とバス
		名称	運転開始日	運転最終日	計画運転日数(往復)	運転本数	車両	指定席車両数	編成案内	片道運賃	指定席運賃	料金	
1990	2	オホーツク流氷ノロッコ号	2/10土	3/25日	9	1	車掌車+無蓋車+客車	0		720			
1991	3	オホーツク流氷ノロッコ号	2/10日	3/10日	10	1	車掌車+無蓋車+客車	0		720			
1992	4	オホーツク流氷ノロッコ号	2/15土	3/15日	10	1	車掌車+無蓋車+客車	0		720			
1993	5	オホーツク流氷ノロッコ号	2/6土	3/21日	14	1	車掌車+無蓋車+客車	0		720			
1994	6	オホーツク流氷ノロッコ号	2/5土	3/13日	12	1	車掌車+無蓋車+客車2両	0		720			
1995	7	オホーツク流氷ノロッコ号	2/4土	3/12日	10	1	車掌車+無蓋車+客車2両	0		720			
1996	8	オホーツク流氷ノロッコ号	2/4日	3/10日	12	1	車掌車+無蓋車+客車2両	0		790			
1997	9	オホーツク流氷ノロッコ号	2/8土	3/16日	13	1	車掌車+無蓋車+客車2両	0		790			
1998	10	オホーツク流氷ノロッコ号	2/7土	3/8日	11	1.5	車掌車+無蓋車+客車1両	0		810			網走で特急リゾートあばしり号へ接続
1999	11	オホーツク流氷ノロッコ号	2/6土	3/14日	37	2	展望客車2両+客車1両	1		810	300		走で特急オホーツク流氷号から接続
2000	12	オホーツク流氷ノロッコ号	2/1火	3/31金	60	2	展望客車2両+客車1両	1		810	300		知床斜里でマウントレイク摩周号と接続
2001	13	流氷ノロッコ号(「オホーツク」入りヘッドマーク)	2/1木	3/31土	59	2	展望客車2両+客車1両	1	○	810	300		知床斜里でマウントレイク摩周号と接続
2002	14	流氷ノロッコ号(「オホーツク」入りヘッドマーク)	2/1金	3/31日	59	2	展望客車2両+客車1両	1	○	810	300		知床斜里でマウントレイク摩周号と接続
2003	15	流氷ノロッコ号(「オホーツク」入りヘッドマーク)	2/1土	3/23日	51	2	展望客車2両+客車2両	1	○	810	300		知床斜里でマウントレイク摩周号と接続
2004	16	流氷ノロッコ号(「オホーツク」入りヘッドマーク)	1/31土	3/14日	44	2	展望客車3両+客車1両	1	○	810	300		知床斜里でお座敷摩周号と接続
2005	17	流氷ノロッコ号(「オホーツク」入りヘッドマーク)	1/29土	3/21月振	46	2	展望客車4両+客車1両	2	○	810	300		ツインクルバス知床号と接続
2006	18	流氷ノロッコ号(「オホーツク」入りヘッドマーク)	1/28土	3/21火祝	48	2	展望客車4両+客車1両	2	○	810	300		ツインクルバス知床号と接続
2007	19	流氷ノロッコ号(「オホーツク」入りヘッドマーク)	1/27土	3/18日	46	2	展望客車4両+客車1両	2	○	810	300		ツインクルバス知床号と接続
2008	20	流氷ノロッコ号	1/26土	3/16日	46	2	展望客車4両+客車1両	2	○	810	300		ツインクルバス知床号と接続
2009	21	流氷ノロッコ号	1/31土	3/8日	37	2	展望客車4両+客車1両	2	○	810	300		ツインクルバス知床号と接続
2010	22	流氷ノロッコ号(20周年記念ヘッドマーク)	1/30土	3/7日	37	2	展望客車4両+客車1両	2	○	810	300		ツインクルバス知床号と接続
2011	23	流氷ノロッコ号	1/29土	3/6日	37	2	展望客車4両+客車1両	2	○	810	300		ツインクルバス知床号と接続
2012	24	流氷ノロッコ号(釧網本線80周年記念ヘッドマーク)	1/21土	3/11日	51	2	展望客車4両+客車1両	2	○	810	300		ツインクルバス知床号と接続
2013	25	流氷ノロッコ号	2/1金	3/10日	38	2	展望客車4両+客車1両	2	○	810	300		ツインクルバス知床号と接続
2014	26	流氷ノロッコ号	2/1土	3/9日	37	2	展望客車4両+客車1両	2	○	810	300		ツインクルバス知床号と接続
2015	27	流氷ノロッコ号(運行開始25周年記念ヘッドマーク)	1/31土	3/8日	37	2	展望客車4両+客車1両	3	○	840	310		ツインクルバス知床号と接続
2016	28	流氷ノロッコ号	1/30土	2/28日	30	2	展望客車4両+客車1両	4	○	840	310		ツインクルバス知床号と接続

れも余剰となった客車の改造車であったが初代編成と大きく異なる機能として、知床斜里方の展望車には運転台が取り付けられ、網走方に連結されたディーゼル機関車を制御できるようになった。これにより終点駅での機回し作業を必要とせず、折り返し時間や作業が効率化された(笹田・岸2001)。2003年に客車(パーベキューカー)が1両増結され4両編成となり、2004年にはその客車に替わり展望客車が1両増備され、さらに2005年には展望客車が1両増備され、それ以降は5両編成となったことから、ノロッコ号の運転は好評であったと言える。(表2)。

2代目編成は展望客車の1両が指定席車となった。2005年に展望客車が1両増結されたため、指定席車が2両となり、2015年には3両、そして最終年の2016年は、展望客車4両すべてが指定席車となった。

6. 運賃と料金

ここでは、斜里(知床斜里)–網走間の片道運賃を比較する。1990年から1995年までは720円であった(図3)。1996年の旅客鉄道三島会社の値上げにより、1996–97年は790円となった(図4)。1997年4月の消費税増税により、1998–2014年までは810円(図6)、2014年4月の消費税増税によりそれ以降は840円(図22)になった。

指定席料金は、1999–2014年まで300円(図9)、運賃と同じく消費税増税によりそれ以降は310円となった。

なお、「普通乗車券でご乗車できます」との表記で、通常の列車とは設備が異なる臨時列車であるが、普通列車と同様の運転であることを、旅客へ注意する一文が掲載されている(図1ほか)。

7. 接続列車とバス

運転開始当初は、釧網本線や石北本線の列車と特に接続を意識したわけではなかった。1998年に旭川–網走間でリゾートあばしり号の運転が始まり、接続列車となった(図6)。翌年以降2015年まで、流水ノロッコ号と運転時期を同じくして、札幌–網走間にオホーツク流水号、流水特急オホーツクの風号と、列車名を変えながら臨時列車が設定され、旭川・札幌

方面の旅客誘致が図られた。

知床斜里から釧網本線釧路方面には、2000–02年にマウントレイク摩周号、2003–04年にお座敷摩周号がそれぞれ接続し、それらが標茶でSL冬の湿原号に接続することにより、釧網本線全体として観光列車を楽しむことができた。2005年(図13)からは、釧路方面への接続列車の運転は取りやめとなったが、代わりにツインクルバス知床号が運転され、ウトロ–知床斜里–川湯–標茶を結ぶ観光ルートが作られた。

8. インターネットとインバウンド

2003年(図11)からは、インターネットサイトのアドレスが掲載された。2015年(図22)からは、パンフレットで動画が閲覧できるCOCOAR2に一部の写真が対応した。

2002年(図10)は中国語繁体字が併記され、2005年(図13)は英語表記も見られた。なお、年によっては外国語のみで作成されたパンフレットも存在した。

9. キャッチコピー

表3にキャッチコピーを示した。初代編成は暖房もなく、展望車には窓もなく、本当にシバレ体験、極寒体験と言えた。しかし、2代目編成には、ポリカーボネート製の窓やダルマストーブ、暖房車が設けられたため、運転開始から数年で極寒体験という言葉は見られなくなった。それ以降は、流水、オホーツク海、知床半島・連山という、車窓から眺めることができる景観が用いられている。運転取りやめが決まっていた2016年(図23)にはキャッチコピーが全く見当たらなかった。

10. 車窓の観光拠点と景観

パンフレットに記載された車窓の観光拠点と景観について表4に示した。全体を通して取り上げられているのが、流水、オホーツク海であり、この列車の一番のアピールポイントと言える。次に多い北浜駅は、オホーツク海に一番近い駅として知名度が高い。2代目編成になって以降、若干の停車時間が設けられ、2002年には小さな展望台、2003年にはオホーツク海を望む本格的な展望台が設置された。停車時間を利用して、展望台からの眺望を楽しめた。

表3. 1990-2016年のノロッコ号パンフレットに記載されたキャッチコピー。

西暦	平成	キャッチコピー 1	キャッチコピー 2	図番号
1990	2	シバレ体験		1
1991	3	シバレ体験		2
1993	5	北海道のシバレを体験してみませんか。		3
1996	8	冬のオホーツク、極寒体験	一度乗ったらやめられない。／どこまでも青い空と、／広がる オホーツクの流水パノラマ。／時速約30 kmのノロッコ号で、 ／冬の自然観覧をお楽しみください。	4
1997	9	冬のオホーツク、極寒体験	一度乗ったら／やめられない／どこまでも広がる青い空と流 水。／時速約30 km日本一おそ〜い／列車ノロッコ号で冬の オホーツクと／シバレを体験してください。	5
1998	10	冬のオホーツク、極寒体験	北方1千キロほど離れたアムール川がオホーツク海の海水を6 薄め、大航海の果てにたどり着くのが流水です。それはまるで 生き物のように、接岸と離岸を繰り返し、青かった海を一夜 にして白い大地へと変えてしまいます。この時がまさにオホー ツクの旬。ノロッコ号で流水を眺めながら、このシバレを体験 して下さい。	6
1999	11	冬のオホーツク極寒体験	春の訪れを待ちわびる／オホーツク海岸の冬の風物詩、／流 水をウォッチング	7
2000	12	冬のオホーツクで極寒体験	冬の使者・白鳥と流水をゆっくりと鑑賞できる。	8
2001	13	冬のオホーツクで極寒体験!!	紺碧の大空と純白の流水原、青と白の世界がここにある	9
2002	14		オホーツクの流水を見ながら、／のんびり列車の旅。	10
2003	15		遠く知床連山からオホーツク海に広がる／流水を見渡しなが らゆっくり走る列車。	11
2004	16		遠く知床連山からオホーツク海に広がる／流水を見渡しなが らゆっくり走る列車。	12
2005	17		遠く知床連山から／オホーツク海に広がる流水を／見渡し ながらゆっくり走る列車。	13
2007	19		流水が広がるオホーツク海ごしに、遠く知床半島を望む!	14
2008	20		流水が広がるオホーツク海ごしに、遠く知床半島を望む!	15
2009	21		流水が広がるオホーツク海ごしに、遠く知床半島を望む!	16
2010	22		遠く知床連山からオホーツク海に広がる流水を見渡しなが ら走り続けて…／おかげさまで今年は運行20周年!	17
2011	23		遠く知床連山から／オホーツク海に広がる流水を／見渡し ながら、今年も／走り続ける。	18
2012	24		遠く知床連山から／オホーツク海に広がる流水を／見渡し ながら、今年も／走り続ける。	19
2013	25		知床連山と／オホーツク海に広がる／流水を見渡しなが ら、今年も走り続ける!!	20
2014	26		目の前に広がる、厳冬のオホーツク海	21
2015	27	目の前に広がる、厳冬のオホーツク海	今年で運行開始25周年	22
2016	28			23

2004年(図12)以降毎年掲載されている「濤沸湖と白鳥」は、車窓から見られる冬らしい景観の一つである。浜小清水駅近くの丘の上にあるフレイト展望台は、2005年以降は掲載がなくなった。それは、冬季間の積雪により観光拠点としてのアクセスが非常に

悪かったためと思われる。替わって、2008年に改築された知床斜里駅舎が掲載された(図12ほか)。観光案内所が設置され、知床観光のゲートウェイとしての役割がある。

止別川橋梁は、前述の通り表紙写真に用いられる

表4. 1990–2016年のノロッコ号パンフレットに記載された車窓の観光拠点と景観。◎：写真と文、○：写真、▽：イラスト。

西暦	平成	車窓の観光拠点および景観								図番号	
		網走駅	オホーツク海	北浜駅・ 展望台	濤沸湖と 白鳥	フレトイ 展望台	浜小清水駅	止別川橋梁	知床斜里駅		流氷
1990	2									▽	1
1991	3									▽	2
1993	5		○	◎						○	3
1996	8		○							○	4
1997	9		○							○	5
1998	10		○							○	6
1999	11		○							○	7
2000	12		○							○	8
2001	13		○	◎		◎				◎	9
2002	14		○	◎		◎				◎	10
2003	15		○	◎		◎				◎	11
2004	16	◎	○	◎	◎	◎	◎			◎	12
2005	17		○	◎	◎				◎北浜	◎	13
2007	19		○	◎	◎				◎北浜	◎	14
2008	20		○	◎	◎				◎北浜	◎	15
2009	21		○	◎	◎				◎	◎	16
2010	22		○	◎	◎				◎	◎	17
2011	23		○	◎	◎				◎	◎	18
2012	24		○	◎	◎				◎北浜	◎	19
2013	25		○	◎	◎				◎	◎	20
2014	26		○								21
2015	27		○	◎	◎				○	○	22
2016	28		○	◎	◎					◎	23

ほど景観が優れており、2005年度以降掲載されている。しかし、2005–08、2012年の写真は北浜駅近くの濤沸川橋梁の写真が誤って掲載されている。

11. ノロッコ号車両の観光的設備

パンフレットに記載されたノロッコ号車両内の観光的設備について表5に示した。初代編成は、種車が余剰となった古い客車、貨車、車掌車で、それにほとんど手を加えずに走らせたため、トロッコ列車そのものが非日常的な観光的設備であったと言えるだろう。「車内温度が低いため防寒服等をご用意します」との注意書きがそれを裏付けている(図1ほか)。

初年とその翌年は記念オレンジカードの販売が掲載され(図1, 2)、1990–99年までは、乗車証明書(図1ほか)も配られた。

2代目編成は、これも余剰となった客車からの改造車ながら、大幅な改造と景観を楽しむのに適した座

席配置や販売カウンターの設置など、車内設備の充実が図られ、トロッコ列車にさらに付加価値がついた。パンフレットも車内設備が充実し、観光的要素が高いことをアピールし、2003年(図11)以降は、観光的設備である、販売カウンター、ダルマストープ、顔ハメ看板の設置など、詳細な情報を提供している。さらに2011(図18)、2012(図19)年には、ノロッコレディによる案内放送がある旨の記載がある。その他、パンフレットには記載がないが、筆者は2016年に車内スタンプの設置を確認している。

12. 沿線の観光拠点、景観、自然現象

パンフレットに記載された沿線の観光拠点、景観、自然現象について表6に示した。1993–2003年はオホーツク流氷館、博物館網走監獄の、網走周辺の観光拠点が掲載されていた。流氷観光船オーロラ号は、1998年から2013年まで、ほぼ毎年掲載され、

表5. 1990–2016年のノロッコ号パンフレットに記載された車両の観光的設備。◎: 写真と文、○: 写真、△: 文、▲: イラストと文。

西暦	平成	車両の観光的設備					乗車証 明書	記念オレンジ カード発売	記念入場 券発売	図番号
		車内の 様子	販売カウンター・ おすすめ品紹介	ダルマス トープ	顔ハメ 看板	ノロッコレディによる 車内見所放送案内				
1990	2	△					△	△	1	
1991	3	△					△	△	2	
1993	5	△					△		3	
1996	8	○					△		4	
1997	9	○					△		5	
1998	10	○					△		6	
1999	11	○					△		7	
2000	12	○							8	
2001	13	○							9	
2002	14	△							10	
2003	15	△	△	◎	▲				11	
2004	16	◎	◎	◎				◎	12	
2005	17	◎	△	◎					13	
2007	19	◎	◎	◎	◎				14	
2008	20	◎	◎	◎	◎				15	
2009	21	◎	◎	◎	◎				16	
2010	22	◎	◎	◎	◎				17	
2011	23	◎	◎	◎	◎	△			18	
2012	24	◎	◎	◎	◎	△			19	
2013	25	△	◎	△					20	
2014	26								21	
2015	27	○	◎		○				22	
2016	28	○	◎	◎	◎				23	

運航時刻を掲載している年も多かった。2003年から2010年までは、運転区間の駅舎に入っている飲食店を紹介する駅グルメが載っていた。2000年から2003年は、各地の冬のイベント紹介を行っていた。2005年に流水ノロッコ号に接続するツインクルバスが運転されると、ウトロや釧網本線沿線の温泉を紹介する記事も掲載された。2001年から2013年まで、流水ノロッコ号と同じく2016年が最後となった知床ファンタジア（オーロラファンタジー）も掲載された。天気の良い日には、オホーツク海の向こうに眺望できる知床連山も、車窓から見える自然景観として2000、2002–13年に掲載された。2005年に知床が世界自然遺産に登録され、翌2006年から2009年まで、知床世界自然遺産が掲載された。2005年から2012年まで、自然現象としてオホーツクのしばれについての説明が掲載された。

13. 沿線に生息する鳥獣等

釧網本線沿線では野生動物を間近に見る機会が多いため、鳥獣等もパンフレットに掲載されている（表6）。1998年（図5）にオジロワシが掲載されてから、2000年（図8）にアザラシ、2001年（図9）にはクリオネが掲載された。これらの鳥獣類は2004年（図12）まで何らかの形で掲載されたが、2014年（図21）のオオワシの写真を除いて、2005年以降の掲載はなくなった。

まとめ

1. 発生品から誕生したノロッコ号

国鉄末期の輸送合理化政策により大量に発生した、余剰客車・貨車を改造したトロロコ列車が全国的に一大ブームとなり、北海道でも同様の車両、列車が誕生した。

表6. 1990-2016年のノロッコ号パンフレットに記載された沿線の観光拠点, 景観, 自然現象および生息する生物. ◎: 写真と文. ○: 写真. △: 文. ▲: イラストと文.

		沿線の観光拠点, 景観, 自然現象										沿線に生息する生物										
西暦	平成	オホーツク(網走)流氷館	オホーツク(網走)網走監獄	博物館	流氷観	流氷船	博物館	ルメ	駅	冬のイウトロ	知床	知床自然センター	知床自然	知床世	斜里岳	しばれ	オジロ	オオワシ	クリオネ	流水の上	アザラシ	
1990	2																					
1991	3																					
1993	5		◎																			
1996	8		△																			
1997	9		△																			
1998	10		◎																			
1999	11		△														○					
2000	12		△				△			△	△				◎							◎
2001	13		◎							△												◎
2002	14		◎							△												◎
2003	15		◎						△	△												◎
2004	16								◎	◎												▲
2005	17								◎	◎												
2007	19								◎	◎												
2008	20								◎	◎												
2009	21								◎	◎												
2010	22								◎	◎												
2011	23								◎	◎												
2012	24								◎	◎												
2013	25								◎	◎												
2014	26																					
2015	27																					○
2016	28																					

沿線に生息する生物: 沿線に生息する生物

国鉄分割民営化後、折しも国立公園への指定で釧路湿原が観光地として注目されるようになり、沿線に景観資源を持つ釧網本線の集客に、余剰車両を改造した、くしろ湿原ノロッコ号を運転した。冬季の間合いとして流氷ノロッコ号を運転し、鉄道では唯一となった展望車両の車窓からの流氷と、一般的な列車では味わえないシバレ体験が可能となった。

2. 2代目編成の導入と運転本数の増加

初代編成の運転は好評で、余剰となった客車をさらに改造し増結するも、車両の老朽化や定員の少なさ等の問題から、2代目ノロッコ号用の客車が改造によって製作された。

2代目ノロッコ号編成は、客席の窓を大きくすることにより、自然景観を観察することを重視した造りとなり、最終的には展望車が4両にもなった。

流氷シーズンに合わせ、期間中はほぼ毎日運転されるようになり、計画運転日数は最大で60日となり、多くの旅客に利用された、海外からの旅行者も増えた。

運賃は値上げや消費増税で最終的には当初の約1.17倍になったが、影響はあまりなかったと思われる。

3. パンフレット内容の変化

運転当初は質素とも呼べる体裁であったが、列車の人気とともに内容も充実した。

当初は網走の観光施設や沿線の鳥獣類を流氷ノロッコ号周辺の観光拠点としていたが、少しずつその内容が変化し、展望車やダルマストーブ、車内販売カウンター、売店のメニュー（特に限定品）の充実、顔ハメ写真、車内スタンプの設置など、車内も楽しめるイベント列車としてのノロッコ号そのものをアピールする要素が多くなった。加えて、観光バスでは当たり前の車窓ガイドをノロッコ号で実施し、ノロッコ号の観光的価値を高めた。

さらに、北浜の展望台新設、沿線の駅グルメの紹介など、ノロッコ号だけでなく、停車した駅でも楽しめるような観光拠点が掲載されるようになった。

ノロッコ号だけでなく、SL冬の湿原号も含めた、釧網本線としてアピールした時期があり、パンフレット内

容も充実した。それに伴い接続列車が臨時運転されたが、想定よりも乗客が少なかったためか5年でバスに代替された。

4. インターネットとインバウンド

2002年(図10)から、台湾や香港からの観光客を意識して、パンフレットに中国語(繁体字)が併記された。さらに英語表記が加えられるなど、外国語の複数併記や、外国語専用のパンフレットを作る等、増加しているインバウンドを意識するようになった。

インターネットサイトのアドレスや、動画アプリ対応の写真に掲載するなど、携帯端末利用を前提とした内容に変化した。

おわりに

寒さ厳しい冬、暗く閉ざされたイメージのオホーツク海の流氷を観光資源として活用し、鉄道の利点を最大限に生かして運転された流氷ノロッコ号は、好評のまま惜しまれつつも運転取りやめとなった(北海道旅客鉄道、「流氷ノロッコ号」の運転について、<https://www.jrhokkaido.co.jp/press/2016/160224-1.pdf>, 2018年1月24日閲覧)。

しかし、2017年よりその代替列車として流氷物語号(図24)が運転され(北海道旅客鉄道、流氷観光期間に「流氷物語号」を運転します。 <https://www.jrhokkaido.co.jp/press/2016/160915-1.pdf>, 2018年1月24日閲覧)、網走市観光ボランティアによる案内放送や物品販売などの積極的な参画によって、観光客に大変好評である(2017年1月29日、北海道新聞朝刊釧路・根室面; 2018年2月4日、北海道新聞朝刊北見・オホーツク面)。普通の気動車に、流氷をイメージしたラッピングを施しただけの列車であるが、これまで培った、流氷ノロッコ号の27年間の財産を受け継いで、末永く冬のオホーツク海沿岸を走り続けてほしいと願っている。

謝辞

本稿の執筆にあたり、未収集のパンフレットを探してくださった、知床博物館、MOTレール倶楽部の橋本雄一郎氏、パンフレットデータを提供していただき、転載を承諾してくださった北海道旅客鉄道釧路

支社，その他ご協力していただいた皆様に感謝申し上げます。

引用文献

- 笹田昌宏・岸由一郎. 2001. 全国トロッコ列車：ファミリーで楽しむ愉快的なレイルウェイたち. JTBキャンブックス. 176 pp. JTB. 東京.
- 函館－渡島大野間鉄道開通100周年記念誌編集委員会 (編). 2003. 道南鉄道100年史遥 [はるか]. 208 pp. 北海道旅客鉄道株式会社函館支社. 函館
- 平井純子. 2010. 黎明期の知床観光：観光関連資料からみた知床の観光地化と観光拠点の変遷. 知床博物館研究報告 31: 41-52.
- 北海道旅客鉄道株式会社釧路支社 (編). 2001. JR 釧路支社鉄道百年の歩み. 250 pp. 北海道旅客鉄道株式会社釧路支社, 釧路市.

斜里 **網走**

シバレ体験

オホーツク流氷

ノロッコ号

運転日
2/10・11・18・25
3/4・11・18・21・25

停車駅と発着時刻

斜里	網走	北	網走
10:00	10:20	10:40	11:00
15:00	15:20	15:40	16:00

記念オレンジカード2/10 発売
●オホーツク流氷ノロッコ号乗車記念 (流氷とノロッコ号の合成写真)
●オホーツク海の流氷 (オホーツク海の流氷の写真)

乗車証明書プレゼント
●「オホーツク流氷ノロッコ号」に乗車した方全員にプレゼントいたします。

乗車箇所
斜里・網走・網走の各駅及び網走駅構内

●各駅乗車でも乗車できます。
●車内温度が低いための防寒靴等をご持参ください。

斜里駅 ☎01522-3-2634 網走駅 ☎0152-43-2362 JR北海道

図1. 1990年の流氷ノロッコ号パンフレット。

みどころ
北浜駅
オホーツク流氷館
網走監獄

体験
してみませんか。
北海道のシバレを

ノロッコ号

オホーツク流氷

乗車証明書プレゼント

運転日
2月6日 7日 13日 14日 20日 21日
27日 28日
3月6日 7日 13日 14日 20日 21日

乗車箇所
斜里・網走間 (1日1往復)

乗車料金
斜里～網走間 ¥720円・¥1360円

斜里駅 ☎01522-3-2634 網走駅 ☎0152-43-2362 JR北海道

図3. 1993年の流氷ノロッコ号パンフレット。

斜里 **網走**

シバレ体験

オホーツク流氷

ノロッコ号

運転日
2/10・11・16・17・23・24
3/2・3・9・10

停車駅と発着時刻

斜里	網走	北	網走
10:00	10:20	10:40	11:00
15:00	15:20	15:40	16:00

記念オレンジカード
●オホーツク流氷ノロッコ号乗車記念 1,000円

乗車証明書プレゼント
●「オホーツク流氷ノロッコ号」に乗車した方全員にプレゼントいたします。

乗車箇所
斜里・網走・網走の各駅及び網走駅構内

●各駅乗車でも乗車できます。
●車内温度が低いための防寒靴等をご持参ください。

斜里駅 ☎01522-3-2634 網走駅 ☎0152-43-2362 JR北海道 創設支社

図2. 1991年の流氷ノロッコ号パンフレット

オホーツク流氷

ノロッコ号

一度乗ったらやめられない。
どこまでも青い空と、
広がるオホーツクの流氷パノラマ。
時速約30km/hのノロッコ号で、
冬の自然観賞をお楽しみ下さい。

乗車証明書プレゼント

運転日
2月4日 10日 11日 12日 17日 18日
24日 25日 3月2日 3日 9日 10日

乗車箇所
斜里～網走間 (1日1往復)

乗車料金
片道運賃 大人790円・小人390円

斜里駅 ☎01522-3-2634 網走駅 ☎0152-43-1693 JR北海道 創設支社

図4. 1996年の流氷ノロッコ号パンフレット。

1997年1月→97年3月16日

冬のオホーツク 極寒体験

オホーツク流氷

ロッコロ

豪華観音プレゼント

運航日
2月8日 9日 11日 15日 16日 22日 23日
3月1日 2日 8日 9日 15日 16日

停車駅と発着時刻

運航区間
斜里～網走間 (1日1往復)

片道運賃
片道～網走間 (大人) 790円 (小人) 390円

※みどころのご案内

●お申し込み先
斜里駅 ☎01522-3-2634 網走駅 ☎0152-43-2362

JR北海道 釧路支社

図5. 1997年の流氷ノロッコ号パンフレット。

1999年2月6日→3月14日

冬のオホーツク 極寒体験

オホーツク流氷

ロッコロ

豪華観音プレゼント

運航日
2月6日～3月14日 毎日運航 37日

停車駅と発着時刻

運航区間
知床斜里～網走間 (1日2往復)

片道運賃
片道～網走間 (大人) 810円 (小人) 400円

●お申し込み先
知床斜里駅 ☎01522-3-2634 網走駅 ☎0152-43-2362

JR北海道 釧路支社

図7. 1999年の流氷ノロッコ号パンフレット。

冬のオホーツク 極寒体験。

オホーツク流氷

オホーツク流氷ノロッコ号

豪華観音と豪華時刻 (予定)

知床斜里～網走間 (1日1往復)

片道運賃 (大人) 790円 (小人) 390円

豪華「リゾートおぼしり号」

片道運賃 (大人) 3,000円 (小人) 1,500円

月ところカイト

JR北海道 釧路支社
880-85 北本通14丁目 TEL:01541-26-1295

図6. 1998年の流氷ノロッコ号パンフレット。

冬の使者・白鳥と流氷をゆつくりと鑑賞できる。

オホーツク流氷

ロッコロ

冬のオホーツクで 極寒体験

豪華観音と豪華時刻 (1999年)

知床斜里～網走間 (1日2往復)

片道運賃 (大人) 810円 (小人) 400円

豪華「リゾートおぼしり号」

片道運賃 (大人) 3,000円 (小人) 1,500円

●お申し込み先
知床斜里駅 TEL (01522) 3-2634 網走駅 TEL (0152) 43-2362

図8. 2000年の流氷ノロッコ号パンフレット。



図9. 2001年の流氷ノロッコ号パンフレット.



図11. 2003年の流氷ノロッコ号パンフレット.



図10. 2002年の流氷ノロッコ号パンフレット.

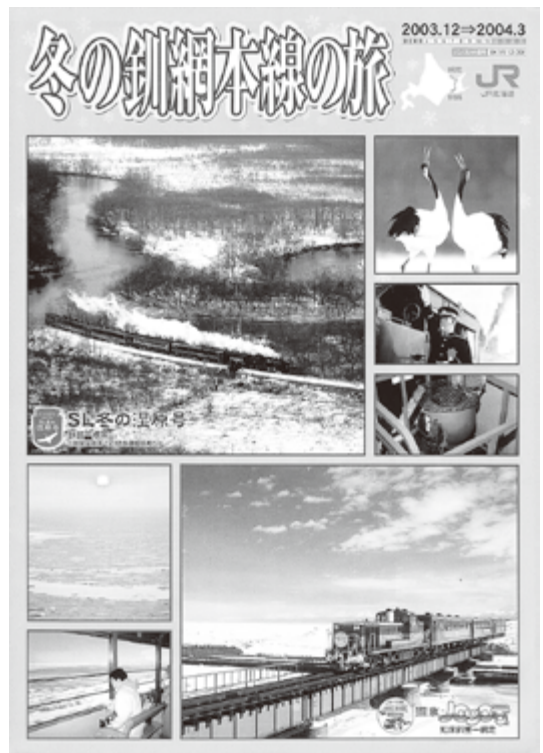


図12. 2004年の流氷ノロッコ号パンフレット.



図13. 2005年の流氷ノロッコ号パンフレット.

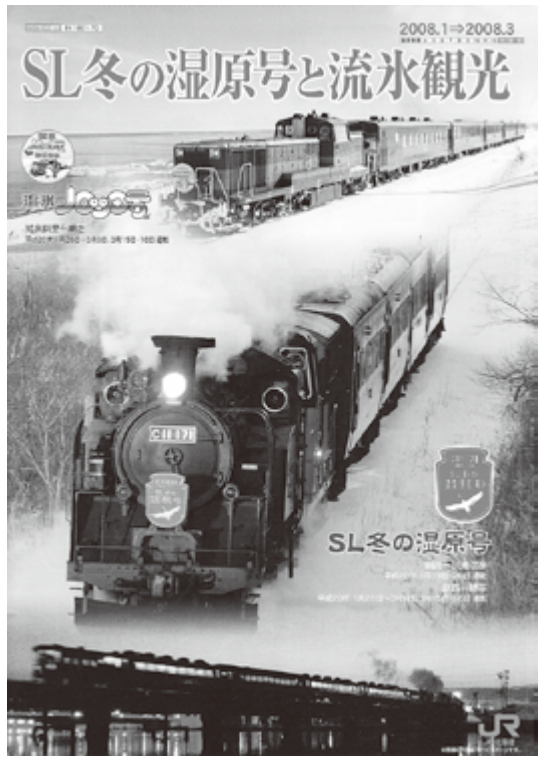


図15. 2008年の流氷ノロッコ号パンフレット.

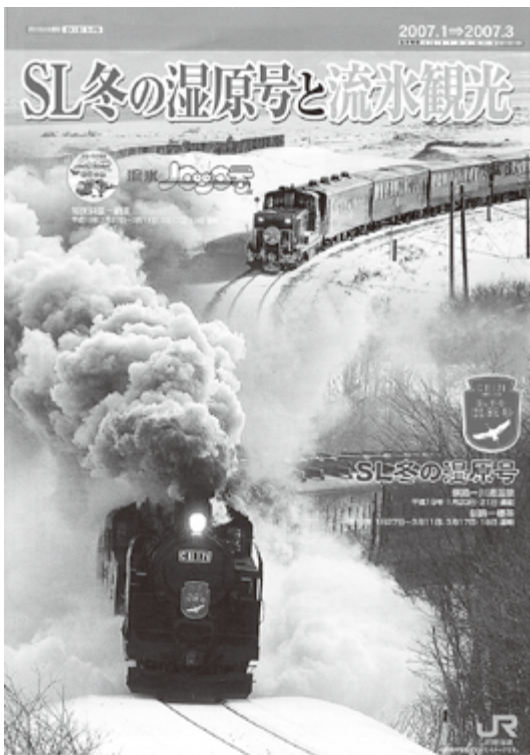


図14. 2007年の流氷ノロッコ号パンフレット.



図16. 2009年の流氷ノロッコ号パンフレット.



図17. 2010年の流氷ノロッコ号パンフレット。



図19. 2012年の流氷ノロッコ号パンフレット。



図18. 2011年の流氷ノロッコ号パンフレット。



図20. 2013年の流氷ノロッコ号パンフレット。



図21. 2014年の流氷ノロッコ号パンフレット.



図23. 2016年の流氷ノロッコ号パンフレット.



図22. 2015年の流氷ノロッコ号パンフレット.



図24. 2017年の流氷物語号パンフレット.